

川エビ類

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館



△この水槽で幅をきかせているミニテナガエビ(水槽番号3005)

5

大和茂之

さみを持った「てながえび」を食べたりした人もいることだろう。

このように親しみ深いものであるにもかかわらず、県内の川にどのような種類のエビがいるのかが明らかにならなかったのはごく最近のことである。

展示しているのか。実は、これらのエビ類の大半の種類は一生の間に川と海を行き来している。川で母親に抱えられた卵からかえった子どもは、いったん海へ流され、そこでプランクトン幼生として育つ。その後、稚エビと

大学フィールド科学教育研究センターが、古座川水系で進めている「古座川プロジェクト」とも関連している。これまで別々に研究されてきた『森』『里』『海』のつながりを解明する新たな研究領域として「森里海連環学」を提唱している。その研究テーマの一つとして、エビ類についての

川と海を行き来する

1マの水槽だ。川や池でエビを採集したという経験は、多くの人が持っていることだろう。透き通った「しらさえび」を釣り餌に使ったり、長い

元瀬戸臨海実験所長の原田英司さんによる2004年以降の研究によるものだ。今では、県南部の河川に10種のエビ類がいることが分かっている。白浜水族館でも、現在7種のエビを展示している。

なあって川をさかのぼり、成長して親エビになって繁殖を行う。成長段階に応じて、川と海を使い分けているわけである。このように川と海を移動する生活様式は、魚類で古くから知られ、サケやウナギ、アユなどはなじみ深いものだろう。

調査が行われている。なぜエビ類は川と海を移動するのだろうか。エビ類にとって川や海の環境はどのような意味を持っているのだろうか。エビ類を眺めながら、森里海の連環について思いをめぐらせてみてはいかがだろうか。

(京都大学助教)

海生物を展示する水族館に、なぜ淡水エビを